

兒童精神力の性的差異

檜崎 淺太郎

一、一般問題

一般的並に特殊的精神的素質の性的差異の科學的決定は、純なる知識として見るも知的興味の高い一問題である。されば精神力學的研究者の多くが、精神力測定の際には、必ず常に其の性的差異を考察して居る。今この精神力學的知識の概括と見るを得べきホイップルの著作を見るも、各種の精神力の測定の結果を記述せる項に於ては必ず「性に基く差異 (sex dependence)」なる一項を加へて居る。其の他個々の原著に見るも、男女を其の被験者となせる場合にありては、必ずこの問題に考察を試みて居る。

かくの如くに精神力の性的差異は、純粹なる知識として見るも多くの人々の一般的興味を唆す一問題であると共に、之を實際的生活即ち社會問題より見るならば、又極めて重要な意義を有して居る。實に多くの社會問題の根底には、性的差異の事

實が横つて居る。實際生活に於ける多くの文化的施設は、皆この性的素質的差異を豫想して居る。而してこの問題に對する從來の常識的見解は、男優女劣の確信である。この一般的確信の下に、多くの個人的並に社會的施設の實施せられ居ることは、教育組織に之を見るも直に其の一端が察せられる。けれどもこの確信は、私の知る限りでは未だ科學的の論考を経たものではない様に思はれる。男優女劣の歴史的傳統的確信はある一方向の見地よりの經驗的事實に其の萌芽を發し、各時代の社會意識が、この傳統的確信を繼承し、更に各時代の一方向の見地よりの一部の經驗的事實に支持せられて、今日に至つたものであらう。さればこの確信は、未だ科學的論考を通過したものではないけれども、ある一部の經驗的事實に基いて居るから、この確信は眞の事實の指數であるのかも知れない。或は又一面的見地よりの比較に基く、訂正を要すべき偏見であるのかも測られない。されば我等はこの問題に對しては、結論を急に求めず、徐ろに確實なる資料を蒐集し、あらゆる方面即ちあらゆる見地より、あらゆる時期を通じて、出來るだけ多くの被験者につき、各種の自然的並に人爲的條件の下に、兩者の比較を試みて、然る後斷乎たる結論を下し、健全なる一般的確信建設の素地を作らなくてはならない。輕卒なる男女素質の優劣論は、多くの社會的施設

設の方針を誤らしむることが多い。

男女の精神的素質の差異の比較に當り、之を如何なる時期に於て試むべきかは、先づ最初に決定せざるべからざる問題である。胎生期に之を試みるは、殆んど不可能であり、少くも之を生後に求めなくてはならない。生後に之を比較するに當つても、精神力發動の始源に於て試みるか、又は發達の頂點に於てするか。素質の程度の比較は、當然其の發達の頂點に於て爲すべきであるが、之を爲さんとするに當つては、發達の環境的條件を一樣にあらしめなくてはならない。然るにこの環境的條件の一樣は、實驗的條件内に於てのみ可能にして、現代の一般男女を被験者となす場合に於ては、既にこの環境的條件の一樣が破られて居る。されは特に長年月に互る實驗的條件の下に於ける測定の結果の外は、男女の素質の程度の比較は、到底絶對的の知識に達することができない状態にある。

素質の性質的比較は、必ずしも、其の素質の發達の頂點に達するの時を選定するの必要はないが、環境的條件を一樣に爲すの必要はこの場合に於ても同一である。然るに環境的條件は、幼稚期に近き程同一に近く、幼稚期より兒童少年青年期と漸次に之を遠かるに従ひ、其の環境的條件の差を増大し、特に少青年期の家庭及び學校教育

の相違は、環境的條件の差を著しく増大せしめる。之を以て素質の質的並に量的差異の比較を青年期又は其の以後に於て之を試みるならば、現實に存する兩者の精神力の相違中、何れが、素質の差より來り、何れが環境の差より來るものなるかを定むる場合に至りて、複雑錯綜したる困難に逢遇する。然るに青年期以前に於ては、人爲的環境の相違比較的僅少にして、同一の家庭並に同一の小學校にあるものにおいて、其の環境的條件は比較的に略ぼ同一であると見られ得る。併しながらこの場合にありても小異を擧ぐるならば、一般に女兒は家庭に於て既に幼時より教育方針を異にし、男兒よりもより多く家庭の作業に使役せられ、又家庭及び學校にありても、男兒の收得するを要せざる一、二の技藝及び學科をより多く學習しなくてはならない。されば既に男女は其の幼兒期より環境的條件をある程度に於て異にして居るとも考へなくてはならない。されば男女の素質の比較研究は、既に其の出發の以前に於て、確實なる研究資料を得べからざるの状態にある。

精神的素質の外的表現は其の刺戟の種類に應じて殆んど無限の變化性を示すから、本問題は環境的條件の相違と相關聯して、益々複雑化し、研究の結果に動搖性を加へる。従つてこの問題に對しては、他の何れの問題よりもより多くの偏見と似非科

學的迷信とが現出する。

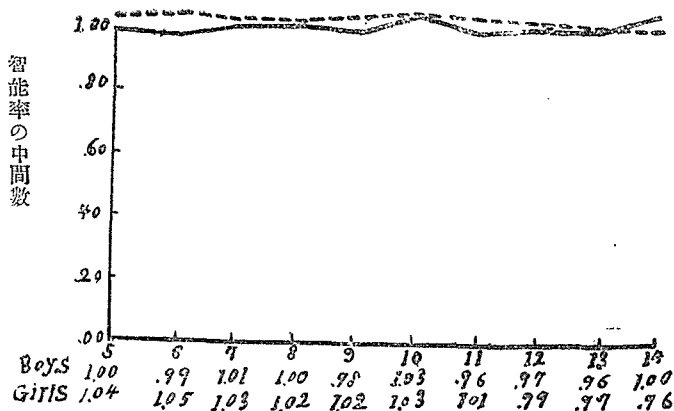
精神力の性的差異の考察につきて、最初に警戒し置くべきは、生理的器官の性的差異よりの類推である。第一義の生理的性的特徴は第二義の生理的性的特徴たる身體の大きさ、身體各部の割合、毛髪、咽喉及び聲帯の大きさ、骨盤、赤血球の量には明らかなる相違があるから、この事實の相違から、精神力にも必然的に性的相違の存在すべきを豫想し、且つ一般に是等の特徴につきては、女子は男子に其の量的特徴に於て小であるから、精神力に於ても女子は男子に劣るものならむとの豫想の下に考察を進め、この豫想に適合せる結果を得るならば、そのまゝ之を承認し、この豫想に反する事實は觀察の誤謬又は例外として之の事實を放棄せんとするの傾向がある。かくの如きは生理的差異の事實よりの類推の下に、事實の眞想を見誤るものである。されば精神力の性的差異の考察に當つては、生理的特徴よりの類推又は豫想又は偏見を全然排除し、公平にして注意深く、確實なる事實の觀察より出發しなくてはならない。而して我等は一步又は半歩にても、この確實なる事實に接近することを以て、本問題研究の當座の目標としなくてはならない。

二、特殊問題

されば上の困難なる一般問題の解決に對する第一歩は、現在の男女の精神力の比較研究にある。彼のエリス⁽²⁾¹⁶の研究の如きは其の一例である。私は環境的條件の比較的同一の状態に近き兒童期の終末にある兒童の精神力の性的差異を、十種の智的精神力並に其の綜合的結果につきて暫く考察を試み、一般問題解決への一資料を記述したい。私が精神力の性的差異の考察につきて、兒童末期のものを選択せしは、本問題の考察に對しては、最も有力なる資料を構成すると考へたからである。

即ち我國の教育制度に於ては、兒童期の教育は男女殆んど一樣の教化課程を定めて居るから、教育の差異より來る性的差異は極小に減縮せられて居る。然るに少年青年期に至ると男女によりて、教化課程教育の程度を異にし、學校を異にし、日常生活を異にし、爲めに到底兩者の科學的比較を許さない。されば男女の一般的素質の科學的比較は我國の現狀に於ては、少年期以上に進むを許さない。之を以て私は比較的に低級智能の發達の頂點に近く、且つ教育及び其の他の境遇の比較的に類似せる條件内に發達せし尋常六學年男女を研究資料蒐集の對象となした。男女精神力

的有力なる文献である。而して氏の結果によれば第一圖(横線の數字は年齢)に示す



第一圖 智能率の中間數による男女智能率の比較、點線は女、實線は男

の比較は、同一の後天的條件を必要とすると共に、更に其の基本に於ては同一の父母より生れたる同一の遺傳的條件を前提となすが故に、同一の學校に通學せる男女を選抜して資料蒐集の對象となした。

發達期に於ける男女の一般的知的素質の差異を科學的に決定せんと試みたる有力なる文献は極めて少い。男女の特殊的精神力の比較に考察を試みたるものは極めて多いが、其の被験者の數僅少にして、何れも決定的の結果に達して居らない。夫故にエリスも男女の智的作用の差異を論議したる結果に於て It cannot be said that in this chapter we have reached any very definite results と述べて居る(2)一九三頁)。最近タ

ーマンの智的素質の品等化の研究に於ける性的差異の事實は是等の不完全なる文献中に於ける比較

が如く、五歳より十三歳までの間に於ては、一般に女兒の智能率が男兒の上にあることが明瞭に示された。この結果は五歳より十四歳までの男兒四百五十七人、女兒四百四十八人につき一般智能測定を試みた結果である(⑤六八一七〇頁)。

ターマンの検査したる被験者の數は從來の學者の研究に比し著しく多數であるけれども、之を各年齢に分類せば約五十人に過ぎないから、未だ其の數に於て充分とは云はれない。けれども多くの精神力につきて調査したるものゝ綜合的結果であるとともに、又殆んど各年齢を通じて女兒は常に男兒の上位に居るから、同一年齡の男女に於ては女兒の精神力は常に男兒の上にあると斷定して大過はあるまい。少くも女兒の男兒に劣るの事實は少しも見ることができない。勿論之の事實の基礎の上に、男女の素質の平等又は女兒の素質の優秀を論定するは早計に失する。何となれば女兒は一般に男兒よりも早熟の傾向あるを以て、同一年齡の男女を比較せば、女兒の早熟なるがために、女兒の精神力の男兒を超過することが起り得るかも知れない。さればターマンの結果は、未だ直に男女の精神的素質の差異を論定する能はずと雖も、同一年齡のものにありては、女兒の精神力は男兒に等しきか、或は少しく男兒に優るの事實は、米國の兒童に於ては動かすべからざる所であらう。然らばこ

の事實は、各民族の兒童に共通であり従つて又我國の男女兒につきても、この現象を見ることを得べきか、或は又反對の事實を呈するか。この一點を尋常六學年生即ち平均滿十一歳半の男兒四百三十四人、女兒三百九十七人の十種の精神力につきて考察して見たい。私の知る限りでは、同一年齡にある、かゝる多數の被験者、かゝる多數の精神力につきての比較を試みたものは、未だ無いかとも思ふ。少くも我國兒童につきては全然皆無である。さればこの結果は、我國兒童の精神力の性的差異に關する科學的考察に對し、一資料を提供し得るかど考へる。

三、精神力の検査

極めて不完全なものではあるが、昨秋私は團體的一般素質検査法を考案し(四九七一四七頁)この検査法の標準値を設定せんがために、大正十一年(西曆一千九百二十二年)十一月上旬より、中、下旬の間に於て、左記の學校生徒(小學校六學年生、中學校一學年生)に就き、十種の精神力の検査を行つた。

東京市小石川區

林町小學校

五六人^男

五六人^女

同

青柳小學校

一一〇

一一七

兒童精神力の性的差異

五五

同	小日向臺町小學校	九二	八〇
同	神田區 和泉小學校	五五	四二
同	赤坂區 青南小學校	一一二	一〇二
同	東京高等師範學校 附屬小學校第一部第二部	五三	二〇
小學校兒童合計			
東京府立第六中學校			
		二七一	四一七
東京高等師範學校附屬中學校			
		九四	
中學生合計			
		三六五	
全部合計			
		八五三	四一七

而して検査したる十種の精神力は次のものである。

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 注意力 | 2 器械的記憶力 |
| 3 關係的記憶力 | 4 論理的明覺力 |
| 5 分類力 | 6 論理的統覺力 |
| 7 抽象力 | 8 推理力 |
| 9 過去の精神容力 | 10 模寫的技巧力 |

茲に注意力と云ふは、數字群片假名群、漢字群、圖形群、文章等を相互に比較し其の異同を辨別する際に働く注意力を意味する。器械的記憶力とは無意義の語と有意義

の語（ナテオ、光）との聯合的記憶及び其の再生力とを意味し、關係的記憶力とは有意義の語（山、兎、草、犬）の聯合的記憶及び其の再生力を意味する。論理的明覺力とは、事物の本質又は最も關係深きものゝ發見力にして、分類力とは各種の觀念の類別力である。論理的統覺力とは、分離せられたる語句の意義ある結合力を意味し、抽象力とは、譬句、諺、和歌等の一般的意義の發見力である。推理力とは、數學的並に一般的推理力を意味する。過去の精神容力とは過去に經驗したるものゝ把持力を意味し、模寫的技巧力とは、簡易なる圖形の模寫力を意味する。

、この十種の精神力の詳細なる内容、及びこの精神力の品等化等につきては、拙著「一般素質検査法の試み」を参照せられたい。

私はこの検査の結果を利用して、男女精神力の相違を小學校男兒四八八人、女兒四一七人につきて考察し、其の考察の結果の概要をば、前記の拙著に報告して置いた（頁二三八一―二五〇頁）。然るに該報告に利用せられたる被験者の中には、特殊の選抜を受けたる五十三名の男兒並に二十五名の女兒を混合せるを以て、男兒の群は、女兒の群に比して比較の條件に有利の點があり、従つて比較の結果に多少の誤謬を加へたるの憂ひがある。されば本稿に於てはこの特殊の選抜を受けたる兒童を全部排除するごとく、更に稍詳細に互りて、男女の性的差異を檢定して(5)の報告の缺陷を補正し

たい。

四、男女兒精神力の比較

私は各種の精神力の程度の品等化を假に點數にて示し、この點數の範圍、頻數代表價分配曲線等につきて、兩者の差異を考察する。私の品等化したる十種の精神力を男女兒につきて比較するに、あるものにおいて、女兒男兒に優り、他のものにおいて、男兒の成績女兒に優つて居る。されば一括して兩者の差異を論ずることができないから、今左に(甲)男兒の女兒に優るもの、(乙)女兒の男兒に優るもの、二種に大別して兩者の比較を示したい。

(甲) 男兒の女兒に優るもの

十種の精神力中、推理力、過去の精神容力、分類力、抽象力、論理的明覺力、論理的統覺力、注意力の七種に於て、男兒は女兒に優り、且つ其の優超の度も今記述したる順序によつて發現する。

1 推理力

推理力は第一表及び第二圖に示すが如く、其の範圍は兩者とも略ぼ同一にして、男

兒は零點より二十八點に達し、女兒は零點より二十七點に至つて居るが、最大頻數男兒は七點にして、女兒は四點と六點との間にある。今假に其の中間數五點を以て眞

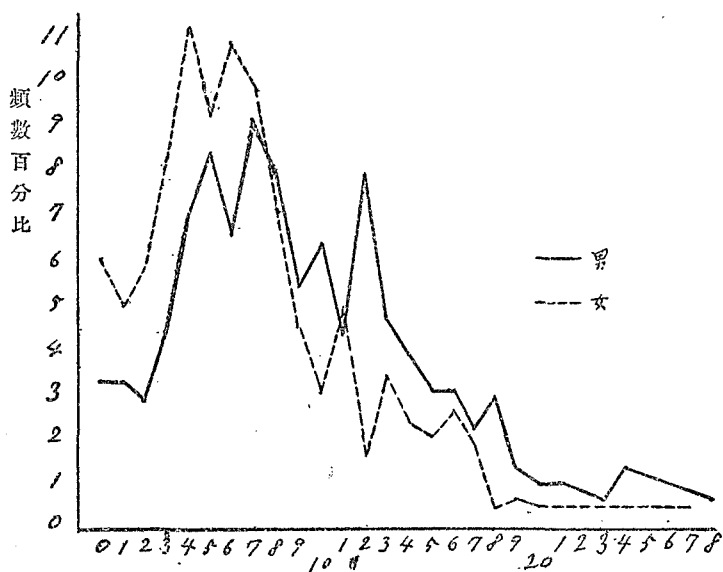
第一表 男女推理力の比較

推理力	類數		同左%	類數		同左%	男女
	男	女		女	男		差の%
0	14		3.23	24	6.04	-2.81	
1	14		3.23	20	5.04	-1.81	
2	12		2.77	23	5.79	-3.02	
3	19		4.38	32	8.06	-3.68	
4	29		6.78	44	11.08	-4.40	
5	36		8.29	36	9.07	-0.78	
6	28		6.45	43	10.83	-4.38	
7	39		8.99	31	9.82	-0.83	
8	34		7.83	28	7.05	0.78	
9	23		5.30	18	4.53	0.80	
10	27		6.22	12	3.02	3.10	
11	16		3.69	19	4.78	-1.09	
12	34		7.83	6	1.51	6.32	
13	20		4.61	13	3.27	1.34	
14	17		3.92	9	2.27	1.65	
15	13		3.00	8	2.02	0.98	
16	13		3.00	10	2.52	0.48	
17	9		2.07	7	1.76	0.31	
18	12		2.77	1	0.25	2.52	
19	5		1.15	2	0.50	0.65	
20	4		0.92	1	0.25	0.67	
21	4		0.92	0	0.00	0.92	
22	3		0.69	0	0.00	0.69	
23	2		0.46	0	0.00	0.46	
24	5		1.15	0	0.00	1.15	
25	0		0.00	1	0.25	-0.25	
26	0		0.00	0	0.00	0.00	
27	0		0.00	1	0.25	-0.25	
28	2		0.46	0	0.00	0.46	

の最大頻數となせば、男女最大頻數の差は二點となる。各頻數中、七點以下は女兒に多く八點以上は男兒に多い。即ち七點以下の頻數に於て女兒は男兒より二一、七%多く、男兒の頻數は八點以上に於て女兒より二七、七%だけ多い。今之を第二圖の分配線に見るに、女兒の曲線の高さは七點以下に於て常に男兒を超過し、男兒の曲線の高さは八點以上に於て常に女兒を超過して居る。

而してこの推理力に於て、總被験者の約五分の四は、性的差異を現さず、殘餘の五分の一の者に於てのみ性的差異發現し、この數の範圍に於て、男兒に正常以上の者多く、女

兒に正常以下の者が多い。



第二圖 男女推理力の分配線

2 過去の精神容力

過去の精神容力は第二表及び第三圖に示すが如く、女兒の點數は零點より百點に至り、男兒の點數は零點より百四十一點に至り、兩者の範圍に顯著なる相違があり、男兒には女兒の最高力以上の者が約二%ある。加之女兒の最大頻數は、十五點より二十九點の間に現出せんとするの傾向あるに對し、男兒にありては、二十點より四十四點の間に現はるゝの傾向を示し、この點に於ても兩者の間に著しき相違がある。又個々の頻數に見るも三十四點以下に於て、女兒は男兒より二一・〇%多く、男兒は三

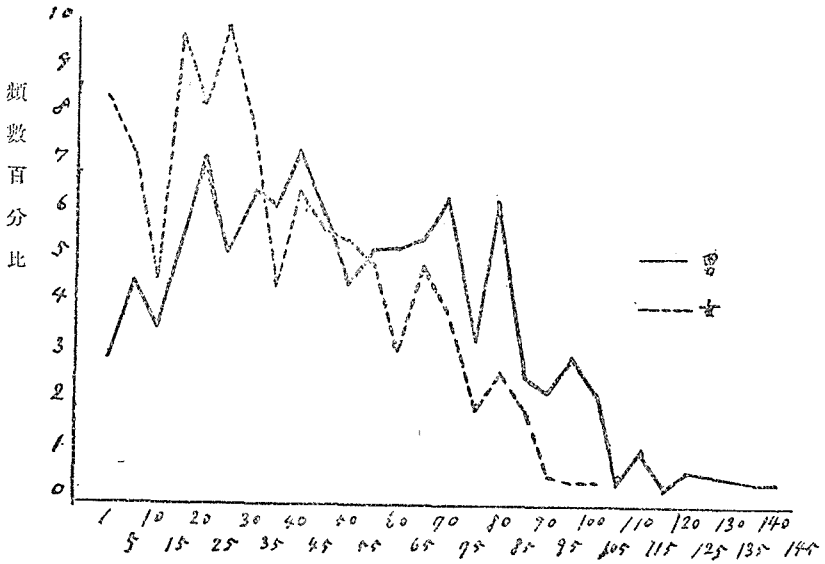
十五點以上に於て同數だけ女兒を超過して居る。されども茲に注意すべき一の事

實は、推理力の場合と等しく男兒は女兒に優ると雖も、一切の男兒がある度に於て一切の女兒に優るのではない。多數の男女兒につき一般的に云ふならば、精神力に於ける性的差異は現出しない。比較的少數の個人、今過去の精神力につきて云ふならば、約五分の一の男女の間に性的差異が現出するのである。以下述ぶる所に就きて、之の點に於ては同一である。唯この人數の比に相違があるのみである。

第二表 男女過去の精神容力の比較

過去の精神容力	類 數		類 數		男女類數の差 %
	男	同左%	女	同左%	
0—4	12	2.77	33	8.31	-5.54
5—9	19	4.38	28	7.05	-2.67
10—14	15	3.46	18	4.53	-1.07
15—19	23	5.30	38	9.57	-4.27
20—24	30	6.91	32	8.06	-1.15
25—29	22	5.07	39	9.82	-4.75
30—34	27	6.22	31	7.81	-1.59
35—39	26	5.99	17	4.28	1.71
40—44	31	7.14	25	6.30	0.84
45—49	25	5.76	22	5.54	0.22
50—54	19	4.38	21	5.29	-0.91
55—59	22	5.07	19	4.78	0.29
60—64	22	5.07	12	3.02	2.05
65—69	23	5.30	19	4.78	0.52
70—74	27	6.22	15	3.78	2.44
75—79	14	3.23	7	1.76	1.47
80—84	26	5.99	10	2.52	3.47
85—89	11	2.53	7	1.76	0.77
90—94	9	2.07	2	0.50	1.57
95—99	12	2.77	1	0.25	2.52
100—104	9	2.07	1	0.25	1.82
105—109	1	0.23	0	0.00	0.23
110—114	4	0.92	0	0.00	0.92
115—119	1	0.23	0	0.00	0.23
120—124	2	0.46	0	0.00	0.46
125—129	0	0.00	0	0.00	0.00
130—134	0	0.00	0	0.00	0.00
135—139	1	0.23	0	0.00	0.23
140—144	1	0.23	0	0.00	0.23

せられる。米國に於けるヂャストローが出来るだけ速く百個の語を記述せしめて、



第三圖 精神容量の分配線
男女過去の精神容量の分配線

男女の觀念界を調査したる結果によれば、男子大學生二十五名は一千三百七十五個の異なる語を記述し、女子大學生二十五名は一千一百二十三個の異なる語を記述して居る。この兩者の差は、男女の精神容量の差を示したものと見ることが出来る。又使用せられた特殊の語一千二百六十六個の中、男子は其の二九・八%を女子は二〇・八%を使用して居る(②一六七頁)。さればこの結果によれば、青年男女に於ては、男子の精神容量は女子の上にあることが察せられ、精神容量に於ける一部の男子の優越は、一般的事實と言ふべきであらう。

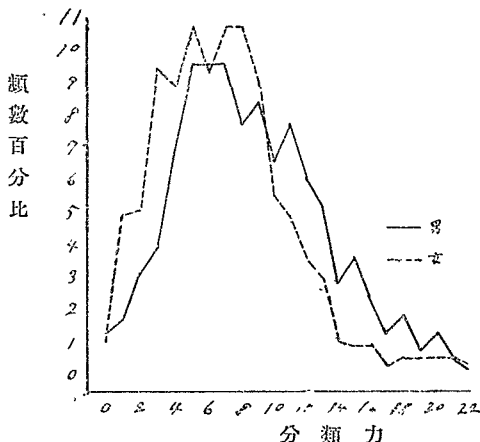
3 分類力

第三表及び第四圖に示すが如く、男女分

八二二%多く、十點以上に於て男兒の頻數は女兒の曲線男兒の上にあり、十點以上に於て男兒の分配線を見るも、九點以下に於て女兒の頻數は女兒よりも一八二二%多い。従つて其

分類力	類 數 男	同左%	類 數 女	同左%	男女 頻數の差 %
0	5	1.15	4	1.01	1.40
1	7	1.61	19	4.78	-3.17
2	13	3.00	20	5.04	-2.04
3	17	3.92	37	9.32	-5.40
4	30	6.91	35	8.81	-1.90
5	41	9.45	42	10.58	-1.13
6	41	9.45	37	9.32	0.13
7	41	9.45	42	10.58	-1.13
8	33	7.60	42	10.58	-2.98
9	36	8.29	33	8.81	-0.52
10	28	6.45	22	5.54	0.91
11	33	7.60	19	4.79	2.81
12	26	5.93	14	3.53	2.46
13	22	5.07	11	2.77	2.30
14	12	2.77	4	1.01	1.76
15	15	3.46	3	0.76	2.70
16	10	2.30	3	0.76	1.54
17	5	1.15	1	0.25	0.90
18	8	1.84	2	0.50	1.34
19	3	0.69	2	0.50	0.19
20	5	1.15	0	0.00	1.15
21	2	0.46	2	0.50	-0.04
22	1	0.23	1	0.25	-0.02

第三表 男女分類力の比較



第四圖 男女分類力の分配線

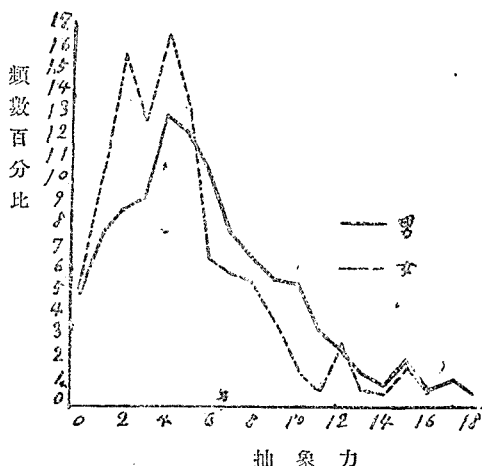
れんとする傾向がある。この點に於ては男女兒は略ぼ同一なるか、或は女兒の男兒に少しく優るの傾向すらあるが、併し個々の頻數を比較すれば、

類力の範圍は全然同一にして、零點より二十二點に達して居る。最大頻數男兒は五點より七點の間に現出すべき傾向を示し、女兒の最大頻數は五點より八點の間に現

の曲線女兒の上にある。而して他の精神力の場合と等しく、全被験者の約八一、八%は其の精神力に少しも性的差異を示さない。

第四表 男女抽象力の比較

抽象力	頻 數 男	同左%	頻 數 女	同左%	男女 頻數の 差%
0	21	4.84	20	5.04	-0.20
1	33	7.60	41	10.32	-2.72
2	37	8.53	61	15.36	-6.83
3	39	8.99	50	12.60	-3.61
4	55	12.67	65	16.37	-3.70
5	52	11.98	52	13.09	-1.11
6	46	10.60	25	6.30	4.30
7	33	7.60	23	5.79	1.81
8	28	6.45	21	5.29	1.16
9	23	5.30	14	3.53	1.77
10	22	5.07	5	1.26	3.81
11	13	3.00	2	0.50	2.50
12	9	2.07	9	2.27	-0.20
13	5	1.15	2	0.50	0.65
14	4	0.92	1	0.25	0.67
15	8	1.84	5	1.26	0.58
16	2	0.46	1	0.25	0.21
17	3	0.69	0	0.00	0.69
18	1	0.23	0	0.00	0.23



第五圖 男女抽象力の分配線

點に達し、女兒の抽象力は零點より十六點に至り二點の相違がある。最大頻數男兒は、四點乃至六點の間に、女兒は二點乃至五點の間に現出すべき傾向がある。個々の

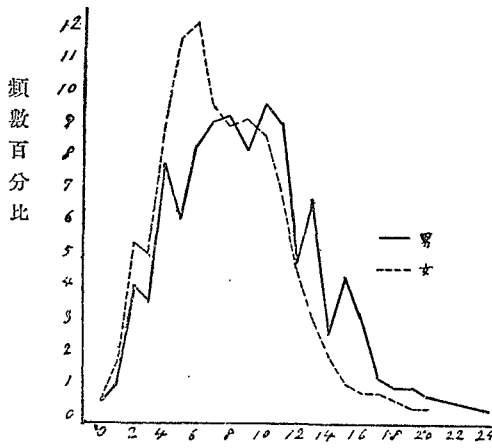
4 抽象力

抽象力の範圍は第四表及第五圖に示すが如く、略ぼ同様なりと雖も、男兒は女兒に比して少しく廣い。即ち男兒の抽象力は零點より十八

六點以上に於て男兒の曲線は多くは常に女兒の上にある。而して一八・二%以外の八一・八%の被験者にありては、他の場合と等しく少しの性的差異も現れない。

論理的明覺力	男		女		男女の差% 頻数の差%
	頻數	同左%	頻數	同左%	
0	2	0.46	2	0.50	-0.04
1	4	0.96	7	1.76	-0.80
2	17	3.92	21	5.29	-1.37
3	15	3.46	20	5.04	-1.58
4	33	7.60	34	8.56	-0.96
5	26	5.99	46	11.58	-5.59
6	36	8.29	48	12.09	-3.80
7	39	8.99	38	9.57	-0.58
8	40	9.22	35	8.81	0.41
9	35	8.06	36	9.06	-1.00
10	41	9.45	34	8.56	0.89
11	39	8.99	27	6.80	2.19
12	20	4.61	18	4.53	0.08
13	28	6.45	12	3.02	3.43
14	11	2.53	7	1.76	0.77
15	18	4.15	4	1.01	3.14
16	13	3.00	3	0.76	2.24
17	5	1.15	3	0.76	0.39
18	4	0.92	0	0.00	0.92
19	4	0.92	1	0.25	0.67
20	3	0.69	1	0.25	0.44
21	0	0.00	0	0.00	0.00
22	0	0.00	0	0.00	0.00
23	0	0.00	0	0.00	0.00
24	1	0.23	0	0.00	0.23

第五表 男女論理的明覺力の比較



第六圖 男女論理的明覺力の分配線

頻數を見るに五點以下は女兒に於て一八・二%多く、六點以上は男兒に於て一八・二%多い。されば之を兩者の分配線に見るも、五點以下に於て女兒の曲線は男兒の上に、

5 論理的明覺力

第五表及び第六圖に示すが如く、論理的明覺力は其の範圍男女により少しく異り、

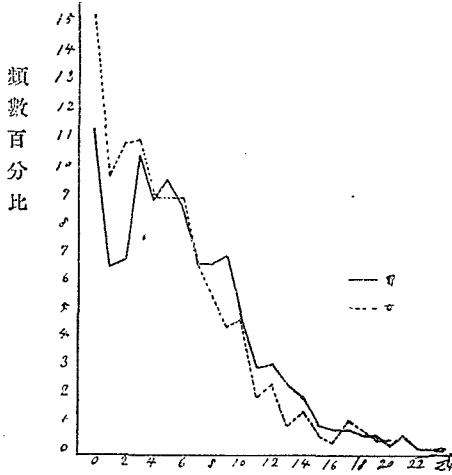
第六表 男女論理的統覺力の比較

論理的統覺力	類數		同左%	類數		同左%	男女差%	
	男	女		男	女		類數	差%
0	49	60	11.29	60	11.11	-3.82		
1	28	38	6.45	38	9.57	-3.12		
2	29	42	6.68	42	10.58	-3.90		
3	45	43	10.37	43	10.83	-0.21		
4	38	35	8.76	35	8.81	-0.05		
5	41	35	9.45	35	8.81	0.64		
6	37	35	8.53	35	8.81	-0.28		
7	28	26	6.45	26	6.54	-0.09		
8	28	15	6.45	15	3.78	2.67		
9	29	17	6.68	17	4.28	2.40		
10	20	18	4.61	18	4.53	0.08		
1	13	7	3.00	7	1.76	1.24		
2	13	9	3.00	9	2.27	0.73		
3	10	3	2.30	3	0.76	1.54		
4	8	5	1.84	5	1.26	0.58		
5	4	2	0.92	2	0.50	0.42		
6	3	1	0.69	1	0.25	0.44		
7	3	4	0.69	4	1.01	-0.32		
8	2	0	0.46	0	0.00	0.46		
9	2	1	0.46	1	0.25	0.21		
20	1	1	0.23	1	0.25	0.02		
1	2	0	0.46	0	0.00	0.46		
2	0	0	0.00	0	0.00	0.00		
3	0	0	0.00	0	0.00	0.00		
4	0	0	0.00	0	0.00	0.00		
25	1	0	0.23	0	0.00	0.23		

は一二六九%である。さればこの精神力に於ても、八七三一%の被験者にありては少しの性的差異も見ることができない。

男兒は零點より二十四點に、女兒は零點より二十點に達して居る。男兒の分配線は蓋然曲線に酷似し、最大頻數は七點より十一點の間に現出すべき傾向を示し、女兒の最大頻數は男兒のものより著しく小に、五點乃至六點の兩點間に現出すべき傾向が現はれ、現實に於ける最大頻數は六點である。されば七點以下の頻數に於ては女兒多く、八點以上の頻數にありては男兒が多い。而して其の相互の超過頻數

6 論理的統覺力
 第六表及び第七圖に示すが如く、論理的統覺力は男女により其の範圍異り、男兒は零點より二十五點に至り、女兒は零點より二十一點に達し、其の分



配線は所謂J形である。従つて最大頻數によつて兩者を比較す

兒童精神力の性的差異

論理的統覺力
 第七圖 男女論理的統覺力の分配線

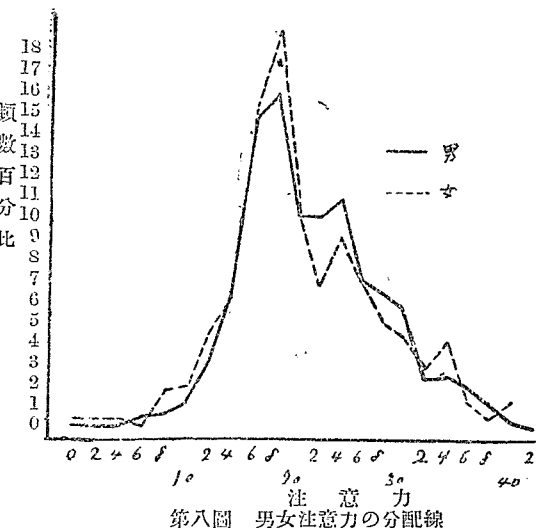
注 意 力	頻 數 男	同左%	頻 數 女	同左%	男女の 頻數の差 %
0——	1	0.23	2	0.50	-0.27
1——2	0	0.00	0	0.00	0.00
3——4	1	0.23	2	0.50	-0.27
5——6	3	0.69	1	0.25	0.44
7——8	4	0.92	7	1.77	-0.85
9——10	5	1.15	8	2.01	-0.86
11——12	13	2.99	17	4.28	-1.29
13——14	26	6.00	24	6.04	-0.04
15——16	61	14.05	58	14.61	-0.56
17——18	67	15.44	73	18.38	-2.94
19——20	43	9.91	39	9.82	0.09
21——22	43	9.91	26	6.55	3.36
23——24	45	10.37	35	8.82	1.55
25——26	30	6.92	27	6.80	0.12
27——28	27	6.22	20	5.03	1.19
29——30	24	5.53	17	4.28	1.25
31——32	11	2.53	11	2.77	-0.24
33——34	11	2.53	16	4.03	-1.50
35——36	9	2.07	6	1.52	0.55
37——38	6	1.38	3	0.75	0.63
39——40	3	0.69	5	1.26	-0.57
41——42	1	0.23	0	0.00	0.23

第七表 男女注意力の比較

論理的統覺力は男女により其の範圍異り、男兒は

ることはできないが、個々の頻數に於て、四點以下のものは女兒に多く五點以上は一般に男兒に多い。この四點以下に於て女兒の男兒を超過するの度は一一・一%である。されば論理的統覺力に於ても、被験者の八・九%は男女によりて其の差異を示さない。

7 注意力



第八圖 男女注意力の分配線

注意力は第七表及び第八圖に示すが如く、其の範圍は兩者略ぼ同様にして、男兒は零點より四十一點に、女兒は零點より四十點に達して居る。最大頻數は兩者とも十八點にして、其の分配線は兩者とも蓋然曲線に酷似し、兩者の差は僅少である。されば拙著「一般素質検査法の試み」に於ては兩者全然同一なりと概論して置いた(5)二四〇頁。

けれども今極めて細密に兩者を比較する時は、十八點以下に於ける頻數は、女兒の男兒に超過する場合多く、十九點以上に於ては男兒の女兒に超過する場合が比較的が多い、而して超過の歩合は六六四%である。されば總被験者の九三・三六%は注意力

於にて少しの性的差異も示さないが、六六四%に於て女兒は男兒に劣つて居る。

(乙) 女兒の男兒に優るもの

第八表 男女模寫的技巧力の比較

技巧力	男		女		男女の差% 類數の
	類數	同左%	類數	同左%	
0	0	0.00	0	0.00	0.00
1	0	0.00	3	0.76	-0.76
2	6	1.38	3	0.76	0.62
3	12	2.77	6	1.51	1.26
4	31	7.14	34	8.56	-1.42
5	65	14.98	45	11.33	3.65
6	80	18.43	47	11.84	6.59
7	85	19.58	69	17.37	2.21
8	79	18.20	66	16.62	1.58
9	41	9.45	63	15.86	-9.41
10	23	5.30	36	9.07	-3.77
11	10	2.30	16	4.03	-1.73
12	2	0.46	9	2.27	-1.81

私の品等化した十種の精神力中、女兒の男兒に比して優

れたるものが三種ある。

其の中最も著しいのは模寫的技巧力にして、次ぎは器械的記憶力、次ぎは關係的記憶力である。今左に順次に其の優れる状態並に程度を記述する。

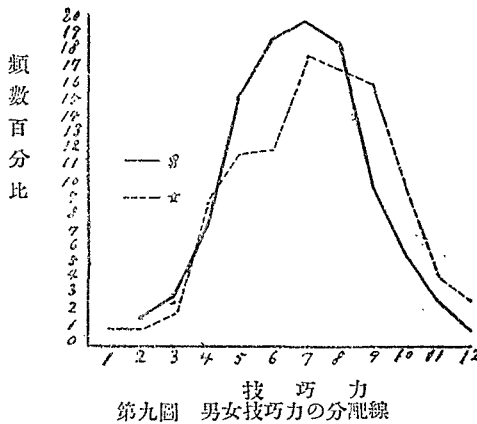
1 模寫的技巧力

模寫的技巧力は第八表

及び第九圖に示すが如く、

男女とも其の範圍は略々同一にして、最大頻數亦兩者同一なるも、個々の頻數に於て、

男兒は女兒よりも八點以下に多く、女兒は九點以上に於て男兒よりも著しく多い。



従つて第九圖に示すが如く、男兒の分配線は八點以下に於て女兒の上であり、女兒の分配線は九點以上に於て常に男兒の上にある。而して兩者互に上下に超過するの

第九表 男女器械的記憶力の比較

器械的記憶力	類數男	同左%	類數女	同左%	男女類數の差%
0	15	3.46	8	2.01	1.45
1	39	8.99	20	5.04	3.95
2	49	11.29	34	8.56	2.73
3	68	15.67	54	13.60	2.07
4	67	15.44	60	15.11	0.33
5	50	11.52	68	17.12	-5.60
6	48	11.06	44	11.08	-0.02
7	29	6.68	36	9.07	-2.39
8	21	4.84	31	7.81	-2.87
9	20	4.61	13	3.27	1.34
10	15	3.46	12	3.02	0.44
11	7	1.61	6	1.51	0.10
12	3	0.69	4	1.01	-0.32
13	1	0.23	1	0.25	-0.02
14	0	0.00	2	0.50	-0.50
15	1	0.23	1	0.25	-0.02
16	0	0.00	2	0.50	-0.50
17	1	0.23	0	0.00	0.23
18	0	0.00	1	0.25	-0.25

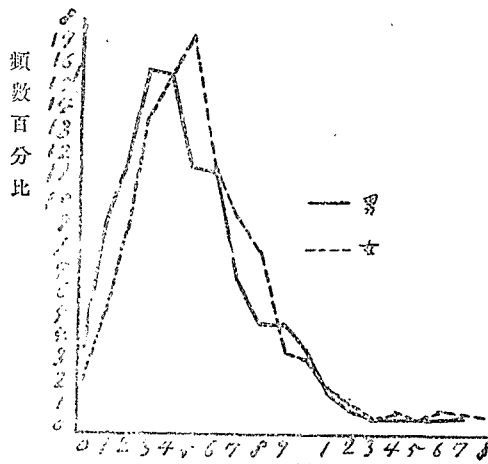
程度は總被験者の一六七二%である。されば男女の約一割七分に於て、技巧力に性的差異が現れる。けれども總被験者の八三二八%に於ては、技巧力に於ても性的差異は少しも現はれない。

2 器械的記憶力

第九表及び第十圖に示すが如く、器械的記憶力の範圍は男女略ぼ同様なるも、女兒は男兒より一點だけ廣い。男兒の女兒に優る精神力にありては、其の最大力に於て男兒は多くは女兒に優れて居たが、女兒の男兒に優る精神力にありては、其の最大力に於て亦女兒は男兒に優るの傾向があり、器械的記憶力の如きも其の一例である。男兒の最大頻數は三—四點に現はるゝの傾向を示し、女兒の最大頻數は四—五點に現はるゝの傾向がある。されば既に器械的記憶力の一般的傾向に於て一點

の差があり、女兒は男兒に一點優つて居る。個々の頻數を見るに、四點以下は男兒に五點以上は一般に女兒に多く、其の超過の度は一〇・五三%である。

3 關係的記憶力



第十圖 男兒器械的記憶力の分配線

るに、兩者略ぼ相一致するが如きも、二十九點以上に於て時々女兒の頻數男兒に少しく優り、二十八點以下に於て男兒の頻數女兒に少しく優り、其の程度は三四八%である。されば關係的記憶力に於ける性的差異は、僅かに約三分五厘の被験者に於て現れ、九割六分五厘の者に於ては、男女とも全然同一の精神力を示すのである。

關係的記憶力は、第十表及び第十一圖に示すが如く、其の範圍、個々の頻數、最大頻數とも兩者略ぼ同一の様に見える。されども細密に兩者を比較せば、最大力に於て兩者同一なるも、男兒に零點のもの〇・二三%あり、最大頻數男兒は二七—二八點なるに、女兒は二九—三〇點にして、この點に於て一點だけ、女兒は男兒に優つて居る。第十一圖の分配線を見

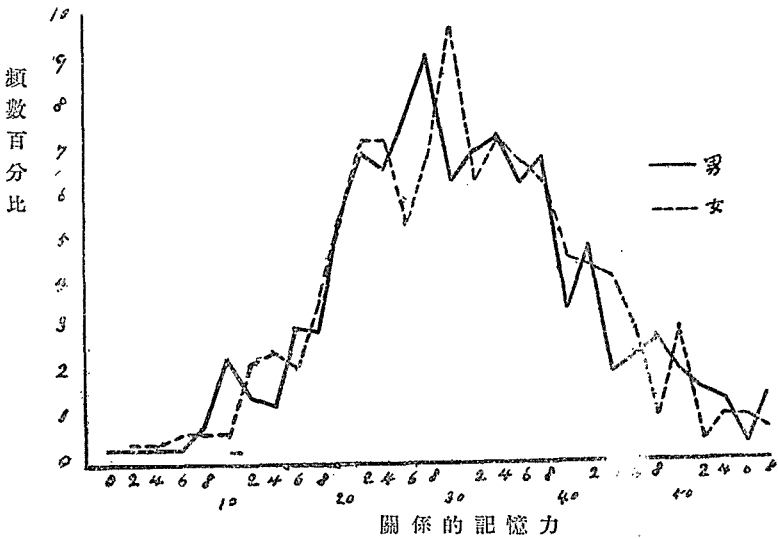
以上二項の結果によれば、記憶力は其の程度に顯著な相違はあるが、しかし一般に

第十表 男女關係的記憶の比較

力的 記憶 的關 記	類 數 男	同左%	類 數 女	同左%	男女 類數の差 %
0—	1	0.23	0	0.00	0.23
1—2	0	0.00	1	0.25	-0.25
3—4	1	0.23	1	0.25	-0.02
5—6	1	0.23	2	0.50	-0.27
7—8	3	0.69	2	0.50	0.19
9—10	9	2.07	2	0.50	1.57
11—12	6	1.38	8	2.01	-0.63
13—14	5	1.15	9	2.27	-1.12
15—16	12	2.76	8	2.01	0.75
17—18	12	2.76	14	3.52	-0.76
19—20	23	5.30	21	5.29	0.01
21—22	30	6.92	28	7.05	-0.13
23—24	28	6.45	28	7.05	-0.60
25—26	33	7.61	21	5.29	2.32
27—28	39	8.99	27	6.80	2.19
29—30	27	6.22	36	9.07	-2.85
31—32	30	6.92	25	6.30	0.62
33—34	31	7.15	28	7.06	0.09
35—36	27	6.23	26	6.55	-1.32
37—38	29	6.69	25	6.30	0.39
39—40	14	3.22	18	4.54	-1.32
41—42	20	4.60	17	4.29	0.31
43—44	8	1.84	16	4.02	-2.18
45—46	9	2.07	11	2.77	-0.70
47—48	1	2.53	3	0.75	1.78
49—50	8	1.84	11	2.77	-0.93
51—52	6	1.38	1	0.25	1.13
53—54	5	1.15	3	0.75	0.40
55—56	1	0.23	3	0.75	-0.52
57—58	5	1.15	2	0.50	0.65

少數の女兒の記憶力は、常に少數の男兒の上にあつて、記憶に於ける優秀性 (superiority) は一部の女兒に與へられて居ると云ひ得る。この記憶に於ける優秀性は少女並に青年、成人の時代を通じて、一貫したものであるか、或は又兒童期の一時的現象であらうか。今この點をヂヤストローの結果に見る。

ヂヤストローが男女大學生につきての自然的永續記憶力の研究によれば、男子の忘却率は四〇%、記憶率は五〇%なるに、女子の忘却率は僅かに二九%、記憶率は五八%であつて、女子は自然的永續記憶に於て明かに著しく男子に勝



關係的記憶力
第十一圖 男女關係的記憶力の分配線

つて居る。氏は更に記憶の研究を The Milwaukee High School の學生につきても試み、記憶につきては、女子の男子に著しく優れることを實證した(②一六九頁)。されば是等の比較的僅少なる被験者の結果に基きて、一般的斷定を下すことは、早計に失するけれども、余の結果と連結考察して、一部の女子の記憶力優秀性の傾向は認め置くべきであるかと考へる。

(丙) 一般精神力

以上記述せる所によれば、十種の精神力中、推理力、過去の精神容量、分類力、抽象力、論理的明覺力、論理的統覺力、注意力の七種に於てある少數の個人に限り男兒常に女兒に優り、模寫的技巧力、器械的記憶力、關係的記憶力に於て、ある少數の個人に限り女兒は常に男兒に

優つて居る。今是等の個々の精神力の總和を以て假に之を一般精神力と名け、之につきて男女兒を比較して見る。一般精神力の算出に當りて、注意力は之を二分の一に減じ、關係的記憶力

第十一表 男女一般精神力の比較

一般精神力	男		女		男女 差の %
	頻 數	同左%	頻 數	同左%	
20-29	6	1.88	2	0.50	0.88
30-39	13	3.00	22	5.54	-2.54
40-49	21	4.84	34	8.56	-3.72
50-59	20	6.08	52	13.09	-6.41
60-69	43	9.91	48	12.09	-2.18
70-79	56	12.90	48	12.09	0.81
80-89	51	11.75	54	13.60	-1.85
90-99	29	6.68	38	9.57	-2.89
100-109	34	7.83	23	5.79	2.04
110-119	37	8.53	27	6.80	1.73
120-129	32	7.37	21	5.29	2.08
130-139	26	5.99	11	2.78	3.21
140-149	16	3.69	9	2.27	1.42
150-159	16	3.69	5	1.26	2.43
160-169	13	3.00	1	0.25	2.75
170-179	5	1.15	1	0.25	0.90
180-189	4	0.92	0	0.00	0.92
190-199	1	0.23	1	0.25	-0.02
200-209	2	0.46	0	0.00	0.46

である。女兒の一般精神力の最小は二十點にして、男兒と殆んど同一であるが、最大



第十二圖 男女一般精神力の分配線

の最小は廿一點にして、最大は二百八點、其の範圍は百七十八點の儘を合計した。左線を示す。

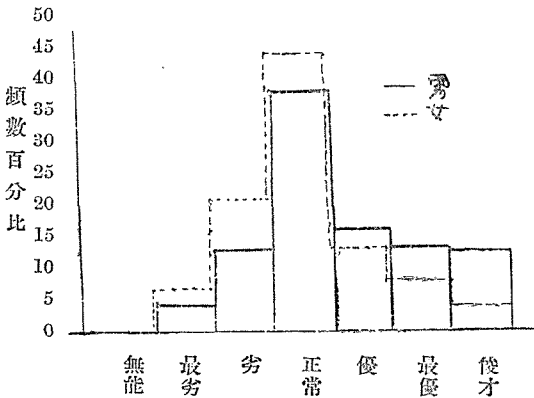
男兒の一般精神力の最小は廿一點にして、最大は二百八點、其の範圍は百七十八點

は百九十八點にして十點の差がある。されば一般精神力の最高點に於て女兒は男兒に少しく劣つて居る。最大頻數を見るに男兒は七十點より八十九點の間に現るべき傾向があり、女兒は五十點より八十九點の間に現るべき傾向が見える。眞の最大頻數は未だ明かに確定し難いが、上の數の中間數によつて代表せしむる時は、男兒は八十點、女兒は七十點となり、十點の差異がある。次ぎに各數値の頻數を比較するに、九十九點以下は概して女兒の頻數男兒を超過し、百點以上は男兒の頻數女兒を超過し、其の超過の度は一七・〇九%である。此結果によれば、男女總被驗者の八二・九一%は、特殊精神力に於けると同様に、一般精神力に於ても少しの性的差異を示さない。唯全被驗者の一割七分の少數の限られたる個人に於て性的差異を示し、この限られたる個人中に於ける女兒の一般精神力は男兒に劣りて多くは正常力以下に位し、同じくこの限られたる個人中の男兒の一般精神力は女兒に優りて、多くは正常力以上に位して居る。従つて兩者の分配線を見るも、第十二圖に示すが如く、九十九點以下に於て女兒の曲線は男兒の上に、百點以上に於て男兒の曲線は常に女兒の上にある。私は各種の精神力の代表價を百となし、其の代表價の七六%—一二四%の者を正常、一二五%—一四九%の者を優、一五〇%—一七四%の者を最優、一七五%以上を優

第十二表 男女一般精神力品等の比較

才、七五%—五一%の者を劣、五〇%—二六%の者を最劣、二五%以下の者を無能と名けて、精神力の品等化を試みたが(四六四—四五頁)今この品等化に基いて一般精神力を品等化し、各品等級の頻數を比較すると、第十二表及び第十三圖の通りになるとの結果によると上の場合と等しく、正常級に於て女兒は男兒より六、四七%多く、劣級に於て九〇一%、最劣級に於て二・一七%、無能級に於て〇・二五%だけ女兒は男兒より多い。

一般精神力の品等	品等點	頻數		同百分比		男女の差 頻數の%
		男	女	男	女	
無能	10 以下		1	0.25	-0.25	
最劣	21—40	19	26	4.38	6.55	-2.17
劣	41—60	56	87	12.90	21.91	-9.01
正常	61—99	173	184	39.86	46.33	-6.47
優	100—119	71	50	16.36	12.59	3.77
最優	120—139	58	32	13.36	8.06	5.30
俊才	140 以上	57	17	13.13	4.28	8.85



第十三圖 男女一般精神力品等級の分配線

俊才級に於て八・八五%だけ女兒よりも多い。

而して比較的に男兒の女兒に比して

頻數の多きは俊才級に屬するものである。第十三圖を見れば、上記の状態が直觀的に察せられる。

五、概 括

四に記述した結果を基礎に、兒童精神力の性的差異を概括すれば、次ぎの數項に表現することができる。

(1) 十種の精神力に於ける男女の性的差異は、多數の被験者には現はれない。この精神力の性的差異を示さない被験者の數は第十三表に示すが如く、各精神力に於て一様でない。其の最も多き場合に於ては、九六・五%に達し、最も少き場合にありても七八・三%を下らない。而して其の平均は約八六%である。又之を一般精神力に於て見るも約八三%は男女に於て、其の精神力に差異がない。されば先づ一般に、男女兒の平均約八割六分は、特殊の精神力に於て、八割三分は一般精神力に於て性的差異を示さないと断定し得る。

然るに若し各精神力の平均數にて兩者を比較せば第十四表に示すが如くに、明らかに男女の性的差異が現はれるから、之れに基きて、一般にある精神力は男兒、女兒に

優り、ある精神力は一般に女兒男兒に優るものとの一般的確信を誘起し易い。けれども、こは特殊の場合を一般化した誤謬であつて、私の研究の結果によれば、男女のいづれか、一般に優れまたは一般に劣ると云ふが如き精神力は、一種も存在しないのみならず、大多數の男女に於いては、上に示すが如くに、少しの性的差異をも示さないのである。

第十三表

各精神力に於ける性的差異及び其の類數

精神力	性的差異を示す點數	境界以下の類數の多き場合%		性的差異を示す點數
		男	女	
力	70			78.29
力	34		21.71	78.96
力	9		18.22	81.78
力	5		18.17	81.83
力	7		12.69	87.31
力	4		11.10	88.90
力	18		6.64	93.36
力	8	16.72		83.28
力	4	10.53		89.47
力	28	3.48		96.52
力	99		17.09	82.91

デヤストローは男女大學々生各二十五名につき、任意に一百語を出来るだけ速く記述せしめて、この合計五千語を蒐集したが、其の中、約三千語は男女ども共通であつた。されば男女の觀念界に於ても、其五分の三は共通の要素を含蓄せることが察せられる(四一六七頁)。

(2) 少數の制限せられたる三五%—二一・七%の個人にありては、十種の精神力並に一般精神力に於て性的差異を示し、あるものは男兒、女兒に優り、あるものは女兒亦男兒に優る。この性的差異を示す平均個人數は約一四%である。この限定せられたる個人に於て、女兒の男兒に劣る

が多いが、就中十種中七種の精神力は男兒に於て優れて居る。この七種の精神力に現はれる男兒の優超性は、該精神力の素質の優秀性に基づくのか、或は境遇の優超に基くのか、之れ次ぎに解決すべき問題である。この問題に對して私の資料は直接の決定力を持たないが、しかし、この少數の個人に於ては、男兒の精神力は正常以上に位し、女兒の精神力は正常以下であるから、この少數の個人中の大多數の男兒は、其の素質の優秀なるがために精神力の優超を示し、女兒は其の素質の劣級なるがために其の精神力に劣等を示したものであるまいか。何となれば、之の兩者の差を境遇の差に、起因せしむるならば、其の精神力の差が餘りに過大に失するからである。私は今上記の推定を試みながら、之を疑問として提出する。

(2) (1)と同様の理由に就き、模寫的技巧力、器械的記憶力、關係的記憶力に於て、少數の個人中に女兒の優超性の現出するは、該精神力の素質の優秀性に基くのではあるまいか。しかしながら、女兒の場合に於て考慮すべきは、女兒の精神力、發展の早熟性の存在せるの事實である。されば現實に現はるゝ女兒の優超度の一定度は、この精神の早熟性に起因せるに相違無い。しかしこの早熟性による女兒優超度を除去するも、技巧力及び器械的記憶力に於ては、猶幾分素質の優秀性に基く精神力の優超が現

出するであらう。されば私は特定の少數の女子は特定の少數の男子に比し技巧力器械的記憶力の優れたる素質を有するものならんとの推定を試み、且つ之を學的疑問として提出する。

(3) 一般精神力に於て、我國女兒の特定の少數者は特定の男兒の少數者に比し明かに劣つて居る。然るに米國の女兒は少くも男子に等しきか、或は優超の傾向さへある。此日米兩國兒童の精神力の性的差異に關する關係の正反對なる事實は抑も何に基くのであるか。検査法其の者の相違か。素質の相違か、環境の差か。こは研究すべき重要な一問題である。私は之を疑問として茲に提出し、識者の示教を乞ふ。

参 考 書

- (1) Whipple, G. M. Manual of mental and physical tests. 1914.
- (2) Ellis, H. Man and woman: A study of human secondary sexual characters, 1899
- (3) Ternan, L. M. the measurement of intelligence. 1916.
- (4) 拙著 團體的一般素質検査法の試み 倫理教育研究 大正十二年一月
- (5) 拙著 一般素質検査法の試み 大正十二年二月